

2014年6月1日発行 第136号

目次	
P1 巻頭言「歴史の運行を支えている時代精神は小説に学ぶ」 港ユネスコ協会名誉会長	P4-7 講演会「エベレスト 何時までも挑戦」 80歳エベレスト登頂～希望の軌跡 三浦雄一郎氏
P2 第31回ディプロマツツ・レクチャー	P8 スリランカの家料理ワークショップ
P3 在日モンゴル国大使館訪問	P9-10 総会／委員会紹介／事務局だより／編集後記

歴史の運行を支えている時代精神は小説に学ぶ

港ユネスコ協会名誉会長 三輪公忠



広島原爆犠牲者慰霊碑に刻まれた碑文「安らかに眠ってください。過ちは繰返ませぬから」に賛否両論があった。公式見解は、主語を人類全体とし、愚かしい戦争の廃絶を願い、その覚悟を表明したものとされている。

いる。

しかし普通は、日本人の戦争責任として、戦後日本人の反省、絶対平和への覚悟と理解されているのではなからうか。

もっとも激しい批判は高名な言論形成者からも聞えてきた。原爆を投下したのはアメリカである。アメリカの自己批判と反省、祈りと覚悟のことばとして、アメリカ大統領の署名こそが相応しいと。

しかし、この理屈を納得するアメリカ人はいない。第一、当のトルーマン大統領は退任後、広島市長の信書にこたえて、あれはペリーのおかげで開国し列強に参画するようになった日本の忘恩行為への懲罰であるといった。また毎年広島攻撃の記念日にエノラ・ゲイの飛行士たちは、ヴォルドルフ・アストリア・ホテルに集い、水爆実験が成功した年には、「やれと言われりゃ、何度だってやるさ。だって奴らが始めた戦争じゃないか。水爆なら、もっとでっかい音がするだろうけどよ」と氣勢をあげている。つまり原爆による無差別

大量殺戮は真珠湾攻撃への報復だというのだ。

たがそこに人種的偏見はなかったろうか。というのはエール大学の日本学の教授ジョン・ホールは同じところに「あれは日本人に対してだからやれたことで、ドイツにはできなかったのではないか」と国民的自責の念におそわれた。つまり、日本人に対する人種差別観を反省した。

アメリカ人の日本人に対する不信感を歴史的に裏づけることはできる。歴史研究において、公文書の使用は重要である。その分析には、その時代の精神を心得ていることが大切である。有効手段の一つは、その時代の小説を読むことである。

たとえば1910年代前後のアメリカでは日本人の大量移民に対する激しい反応があった。この時代の精神は、たとえばスコット・フィッツジェラルドの小説を読むだけでかなりわかる。ハーヴァード、エール、プリンストンに学んだエリート青年らが、「日本が攻めてくる」、「アメリカが占領される」などと呟くのである。真珠湾攻撃は、ただその実証であり、避けがたい歴史の運行に過ぎなかった。

この運命観がよそ目にどれほど極悪非道に見えようとも原爆投下への反省、自己批判を呼び覚ましたりはしないのである。(2014・5・19)

(上智大学名誉教授)

第31回ディプロマッツ・レクチャー

日時：2014年2月13日(木) 午後3時00分～4時30分
会場：国際文化会館 講堂

講師：平松 賢司 氏

外務省 総合外交政策局長



テーマ：Current Japanese Foreign Policy

36名の各国大使と40名の在日外交官が出席

「ディプロマッツ・レクチャー」は協会創設以来継続している、港ユネスコ協会ならではの事業です。年1回、駐日各国大使および大使館員を対象に、日本外交をより深くご理解いただくことを目的として、外務省幹部の方がたなどを講師としてお迎えし、英語で講演をいただいています。

第31回になる今回のディプロマッツ・レクチャーは、講師として外務省総合外交政策局 平松賢司局長をお招きして開催し、在京の36名の各国大使と40名の外交官にご参加をいただきました。



国際文化会館の講堂という広い会場でしたが、テーブルを入れる余裕がなくて、椅子だけを並べて座っていただくことになりました。

アカーマン副会長が司会を務め、高井会長の開会挨拶の後、松本副会長が平松局長の経歴等を紹介いたしました。

平松局長は配布資料に沿って、日本政府の外交方針と、2014年から2015年にかけての行事予定を概説され、「日本は平和を愛する国であり、世界の安全と安定に貢献したいと願っている。これまでの実績を見て頂きたい」と強調されました。

質疑応答の時間には、大勢の大使及び外交官から質問が寄せられました。

近隣国との関係が難しくなっている今日、平松局長率いる外務省の方がたには、これからも国際社会の中における日本として、「賢明で節度ある、礼儀正しいやり方」で積極的外交にご尽力していただくように、お願いしたいと思いました。



なお、今回のイベントには委員会以外の大勢の港ユネスコ協会の会員にご協力いただきました。感謝申し上げます。

(国際学術文化委員会担当常任理事 宮下ゆかり)

モンゴル国大使館訪問

日時：2014年3月19日（水）14：00～16：00

場所：渋谷区神山町

恒例の大使館訪問、今年は「モンゴル国大使館」を訪問させていただきました。

当日は3月中旬とはいえ、肌寒い日となりました。申込みの会員全員（15名）は、閑静な住宅街にある大使館の門の前に、定刻前に集まりました。

予定の14時30分に、大使の秘書を兼務されている一等書記官・文化担当官のボロルチメグさんが満面に笑みを浮かべながら、私たちを迎え、2階の立派な応接間にご案内下さいました。ボロルチメグさんは静かな澄んだ声で、にこやかに、きれいな日本語でモンゴルについて説明を始められました。



「1972年2月に始まった両国の国交は、今年で42年になります。モンゴル国の大使館は当初、銀座のホテルに開設し、2年後に現在の場所を購入しました。大使公邸は別棟ですが、この4階建ての建物には、大使館機能と大使館員の住居などのすべてが含まれています。主に、政治文化部、経済商務部、領事部に分かれて、10名が勤務しています。大使はじめ、大使館員とその家族・子どもたちを含め、約40名の全員がここに住み、全員が日本語を話せます。

領事部は、日本に住む約4,500名のモンゴル人の世話をしています。2010年から、日本国籍の所持者は30日以内なら、モンゴル入国のビザが不要になりました。」

応接室の奥まった一隅には、国旗、チンギスハーン氏の肖像、馬頭琴、馬の鞍などが展示されていました。国旗の青は青空、すなわち天を拝む宗教を示し、赤は情熱、黄色は炎、太陽、月、地球、水、弓、魚などを示すというたいへん興味深いものでした。



チンギスハーン氏の肖像の額の回りに飾られている、絹布の青と白のハダックが目を惹きます。青は、天、尊敬、神秘などを示し、白は穢れのなさなどを示すそうです。白を牛乳で象徴し、モンゴル人は今でも毎朝、都市部でも、牛乳を供える習慣があるとのこと。なお、あの有名な馬頭琴はユネスコの無形文化財になっています。

人口300万人の国に、4,000万頭の家畜がいて、主たる家畜は馬、牛、羊、山羊、駱駝の5種類。（地下資源に対し、）家畜は地上資源と呼ばれているそうです。

「伝統的遊牧民の住居は『ゲル』。1個のゲルに1家族が住み、家畜の世話をしながら四季の変化に従って、常に移動するため、釘は1本も使わず、1時間で折り畳むことができ、これを牛や駱駝や馬車に積んで移動する。

北東は森林地帯、西は4,000メートル級の山脈、東は高原、南は砂漠。砂漠といっても、草原に近く、恐竜の化石が出ている。面積は日本の4倍以上。雨季はなく、冬はマイナス20～40度にもなる。観光には6月、7月、8月が最適。日本から直行便が週2日飛んでいて、4時間半で首都ウランバートルに着き、満天の星空を仰ぎ見ることができる」等々の説明に、会員の口々から、思わず「行ってみたい！」との声が出て来ました。

「1991年に民主化するまで、旧ソ連邦に属する社会主義国でした。現在のモンゴルと日本の関係はたいへん良くなっています。モンゴル人は日本からのODAには感謝しています。親しみを感じている国の筆頭は日本です。」と話して下さいました。日本人も、相撲界で活躍する横綱がたの出身国であるモンゴルが大好きです。

モンゴル語は日本語と語順や文法が同じだと伺い、どの横綱も日本語がとてもお上手なわけを納得しました。

ボロルチメグ一等書記官のわかりやすいご説明を伺い、今まで知らなかったモンゴルの国や人々の暮らしについて理解を深めることができ、一層親近感を強めることができました。

最期になりましたが、この訪問の実現に多大なご尽力を頂いた長門芳子理事に心よりお礼を申し上げます。



80 歳 エベレスト登頂 ～ 希望の軌跡

エベレスト いつまでも挑戦

日時： 2014 年 4 月 8 日 (火) 午後 6 時 30 分から

会場： 港区立麻布区民センター・ホール (港区六本木)

講師：三浦 雄一郎 氏

(プロスキーヤー、クラーク記念国際高等学校・校長)

2013 年 5 月 23 日、三浦雄一郎氏は 80 歳 223 日という世界最高齢で、地球最高峰エベレスト (8,848m) に登頂されました。人類として新たな可能性の扉を開け、限界を広げられました。しかし、ここまでの道のりは決して平坦なものではなく、不整脈、骨折、高齢という様々な肉体的ハンディを乗り越えた上で、達成されました。



講師 プロフィール

- 1932 年 青森市生まれ。 北海道大学獣医学部卒業
- 1964 年 イタリア・キロメートルランセに日本人として初めて参加、時速 172.084 k m の世界記録樹立
- 1966 年 富士山直滑降 (スキー界初のパラシュートブレーキ使用)
- 1970 年 エベレスト・サウスコル 8,000m 世界最高地点スキー滑降 (ギネス認定) を成し遂げる
その記録映画「THE MAN WHO SKIED DOWN EVEREST」は長編記録映画部門でアカデミー賞受賞
- 1985 年 ヨーロッパ大陸最高峰 Mt. エルブルース、ソ連 (5,633m) 登頂及びスキー滑降、
南米大陸最高峰 Mt. アコンカグア、アルゼンチン (6,959m) 登頂及びスキー滑降
長男 雄大氏との親子チャレンジにより、世界 7 大陸最高峰のスキー滑降 (人類初) 完全達成
- 2003 年 5 月、次男で元オリンピック選手の豪太氏とともにエベレスト山 (8,848m) 登頂最高齢記録 (70 歳 7 か月)
及び、日本人初親子同時登頂記録樹立。
- 2008 年 5 月、2 度目のエベレスト山登頂 (75 歳 7 か月)
- 2013 年 1 月 再発した不整脈を抑えるため 4 度目のカテーテルアブレーション手術を実施。
5 月 23 日 80 歳 223 日でエベレスト Mt. 登頂 (3 度目)。世界最高齢登頂記録更新 (ギネス認定)

港ユネスコ協会会長・高井光子の開会挨拶より

日本は世界に誇る長寿国になりましたが、私ども高齢者にとりましては行く末に希望を持ち続けられるのか心配なこともございます。こういう中、高齢や病気をものともせず、果敢に冒険に取り組みされる三浦氏のお姿、生き方に大きな励みと勇気を与えられました。

老若男女にとりまして、「夢」「挑戦」「勇気」を持つことの大切さ、夢は諦めなければ実現するということ、熱意を持って努力し続けることの大切さなどを、直に、体験話を通して伺えますこと、たいへん有難く存じます。

エベレスト 80 歳・登頂記録映画



三浦雄一郎氏の 80 歳エベレスト山登頂記録のエッセンスを約 15 分にまとめた映像です。同行された次男豪太氏、医師らとともに死力を尽くしてのエベレスト山登頂記録。

登山行程ペースを普通の登山家の倍の時間を設定してゆっくり登る、というお話から始まり、豪太氏がベースキャンプへ、隊長である父・雄一郎氏の血圧、不整脈、

心肺状況無線で「隊長の体調は絶好調です。」とユーモアを交え報告する姿、死の淵が牙をむく「クレパス」を梯子で越える姿、食事風景・最高峰でのお茶会、頂上を極めての感動の一言。氷河、岩肌、空を見上げれば満天の星、数千メートルでの凍てつくばかりの風の音、大スクリーンならではの映像の迫力。あっという間の 15 分間の映像でした。会場はエベレストの空気で一杯に満ちました。

港ユネスコ協会副会長・松本 洋の、講師ご紹介より

三浦ファミリーの太くて大きな家族愛があるからこそ、今回もエベレスト登頂を成し遂げられたのだと思います。父上・敬三氏は 99 歳の時、モンブラン山スキーにタッグを組んで成功されました。母上はスキー選手、奥様はアルペンスキーヤーという山・スキー一家です。この度の登頂には、ご長女はベースキャンプで援護、ご長男・雄大さんはコンピューター専門家として天候気象を担当、ご次男・豪太さんは頂上まで同行されました。

本日は、世界最高齢で最高峰への道のりを、「ご家族の深い愛情」のお話を交えてお伺いいたします。

三浦雄一郎氏の講演

ご紹介で「家族で応援してくれた」とお話しいただきましたが、究極の介護をやってもらったといえます。心臓、血圧などを常に測ってもらいながらの登頂でした。

★スキー滑降

37 歳（1970 年）でエベレストをスキー滑降。エベレストに登る人は多い中、パラシュートを使って滑るという事は、世界中でも珍しいことでした。今日でも語り草になっています。この時の記録は石原プロを総動員して撮影していただきましたが、後にハリウッド映画祭で長編記録映画部門のアカデミー賞を受賞しました。また、この映画はホワイトハウスにおいて、ジミー・カーター大統領が 4 年間で 20 回も見直し、そのたびに勇気と元気をもらったと言われたフィルムでもあります。

エベレストを、パラシュートを付けて滑降した時のことですが、大きなクレパスを越えるためにジャンプした際に転倒。果てしなく滑り落ち「もはや」と思った時、運よく 1 本のスキー板が腕に挟まりブレーキの役を果たしてくれたのです。「あっ、俺は生きている！」「生きているとは何なのだろう！」。そして、もう一回、三浦雄一郎の人生劇場をやれるのだという喜びの思いがあふれてきたのです。また、南極での雪崩に巻き込まれ、九死に一生を得た時も、「神さま仏さまが拾ってくれた。もう一回人間をやりなさい！」と言われたと感じ、「こんな豪華な贅沢なことはない。」これらは、力と技術で助かったのではなく、まさに偶然のこと、神さま仏さまの施しがあったればこそだと思っています。



高校時代から振り返ると、「あそこで助けてもらった」、「ここで助かった」、「運よく生き延びたてきた」ものだとよく思います。私と同年代とか若い人たちで、植村直己とか世界でも最強の冒険家、登山家が相次いで亡くなっていく中、僕だけがもっと危険なことをやっていたながらも、生かさせていただきました。そんなこんなで 60 歳近くまで、北極だ、南極だと駆け回りましたが、「よく死なないで生きているものだ。一体『死ぬ』とは何なのだろう」という思いをすることが人生の中で幾度もありました。

★普通の人生

60 歳を過ぎ、仕事はリタイア。これからは、危険のない普通の人生に戻して生きて行こうと考え直し、ビール、ジンギスカン、焼き肉の、食べ放題、飲み放題やらをしていたら、あっという間に「メタボ」になり、走るトレーニングも止めてしまっていたわけです。

体重はどんどん増え 88kg、体脂肪も増え、階段も苦しい、という生活でした。そうしていたら突然に明け方、背中から心臓にかけての痛みから狭心症の発作を起こしたのです。自業自得の生活習慣病、不摂生の結果ですから、ぼろぼろの体になっても病院へ行くのをためらっていました。ある日家内の病院通いの同伴をしてのことで、その知り合いの医者につかまり、逃げる暇もなく検査となりました。

★目標設定

このままでいったら長寿も難しいと宣言されてしまいました。ちょうどそのころ、父・敬三が 99 歳でモンブランの氷河をスキー滑降目指していたのです。そして次男・豪太は長野オリンピックやらWカップやら、その中間の私は、負けてられない。「じゃあ、俺はエベレスト」と、目標を設定しました。

メタボ、狭心症などがかかっていると、どうしても守りの体勢になってしまいます。せいぜいでウォーキングやらラジオ体操くらいです。「エベレスト」の目標を立ててからは、「これではいけない」と思い、攻めの健康法に転じました。

体力、脚力、心肺機能を最低 40 歳代の数値になるよう、そして部分的には 20 歳代の数値になるようもっていかなければならないのです。

一般的に登山家 20 歳の体調でエベレストを登ると、頂上では 90 歳の身体になってしまう、と言われていました。これを私の 70 歳での登頂に合わせてみると 140 歳。人類の生存年齢をはるかに超えてしまうわけです。何はともあれ、アンチエイジングを意識し、まずはメタボと狭心症からの脱却に目標を絞り込んだのです。

★70 歳登頂への道のり・・・メタボと狭心症を乗り越えて

いろいろな仕事をしながらですが、睡眠は 9 時間、ごろごろしながらゆっくりと。早朝の危険なランニングなどはしない。そして、足首とザックに重りを課して歩くことを考えました。最初は片足に 1 kg 両足で 2 kg、ザックに 5 kg。時には、東京の住まい原宿から三宅坂、皇居、丸の内を越えて新幹線乗場まで汗びっしょりで歩いたりもしました。そのように無理なくトレーニングを重ねていきました。1 か月が過ぎ、2 か月 3 か月を過ぎてきましたら、何と体重が 5 kg 減ったのです。その後、半年の間に少しずつならして片足に 5 kg。

この方法の効果が見えてきたころ、改めて「これでエベレストに登れたら面白い」という気持ちになり、3 年かけて片足 5 kg ずつから 10 kg ずつへ増やし、背中には 30 kg のザックを。

ひたすら「足の重りとザックの重り」のトレーニングで体力・脚力が回復、そしてメタボと狭心症の発作から縁遠くなり、何にもまして骨が太くなってきたのです。

ついに 70 歳 7 か月で世界最高齢でのエベレスト登頂ができたのです。

★2 度目のエベレスト 75 歳への挑戦、そして 80 歳の登頂に向けて

帰国後、70 歳の時、登山中にも病状が悪化したという「課題である『不整脈治療』」。

いろいろな先生に断られながら最後に土浦の名医に出会い、手術していただくことができたのです。普通 3~4 時間かかる手術ですが、6 時間もかけて頂いたことでした。お蔭で 75 歳の登頂を成し遂げることができました。70 歳の時と違って頂上での眺望が良かったのがなによりでした。

その後、76 歳でスキーのジャンプの失敗から左の大腿骨付け根の骨折、右の骨盤 4 か所が折れるという、ぐしゃぐしゃの大けがをしてみました。寝たきり状態でしたし、家内からは「80 歳でのエベレストは諦めろ」という言葉を受けながら「オレは何とか直す」の意気込みでした。



それからは、鮭の頭、中骨を家内の味付けで一日一匹見当を毎日まいにち食べ続けました。肉ももちろんサプリメントも各種。そしたら、寝返りを打つことができなかつたのが 2 か月半過ぎるころから骨が付き始めたのです。それも正常に、かつ、中高生並みの速さで付き始めていたのです。関節も半月板も腰椎も重りを付けての散歩が良い影響を与えてくれたのだと思っています。そういうことで、攻めの療法をずーと続けています。

★3 度目の登頂

「年寄り半日仕事」という言葉がありますが、それを実践、1 日の行程を半分にしました。「朝出て昼にはキャ

ンプ」というふうに1日当たりの負荷を半減させ、1か月の登山行程で5,300mのベースキャンプ迄たどり着きました。直前の心臓手術のリハビリも併せてできたような状態で、とうとう8,500mまで行けたのです。

そして、そこで、世界最高所でのお茶会、利休も信長も経験していない「8,500mでのお茶会」を楽しみました。カフェインをとっても仮眠でなく熟睡ができ最後の鋭気を引き出しでもくれました。

★「夢を持ち続ける」

考えてみたら「エベレストへ」という目標が無かったらそのまま寝込んで、「寝たきり」になってしまっていたのではと思います。

人間というのは、「夢」やら「希望」を持ち続け、「どうしてもしなければならぬ」と思い続けることが大切なのではないでしょうか。その途中のトラブルを「夢の力」で回復につなげ、最終目標の「エベレスト」につながっていったのではないかと考えています。

そして「死神」の声が聞こえても、「100%、120%も生きて帰るのだ。どうやったって生きて帰るのだ。」という気持ちが大切です。

計6回の心臓不整脈手術を超えて、次にやりたいことは、「85歳には、世界で6番目に高い8,201mの山頂をスキーで滑る」です。そのためには、7回目の手術を克服しなければなりません。病気や怪我をしても「エベレスト」を登る気持ちでいっぱいです。

参加者との質疑応答

質問1：(男性) 心臓手術されたり、怪我をされたりの中、強い気持ちを持ち続けるためには、どのようにしたらよいのでしょうか？

答：ベンチャーを興すこと、また多大な費用の掛かることに取組むこともあるでしょう。どんな時でも「諦めない」「夢はかなう」としつこく、しつこく思い続けることです。そのために準備(トレーニング)は必要です。いずれにしましても「メンタルの要素が大きい」と思います。

質問2：(男性) 私は小学校の時からスキーをされる三浦先生にあこがれを持ち続けていました。例えば「国立冒険記念博物館」のような皆さんが集まれる施設をつくっていただけますか？

答：今、「三浦雄一郎冒険大賞」を考えていただいているようです。

< 感想 >

最初に三浦氏のご紹介として「3回ものエベレスト登頂は、三浦ファミリーの暖かい支えがあったればこそ」とありましたように「家族愛」とともに、氏ご自身の「夢は諦めなければ叶うもの」「では、どのようにして」の具体的なお話を氏の60歳頃からについて、お話し頂き、約20年間の「思い」と「行動」を詳細に伺えましたことに深く感動いたしました。

三浦氏のエベレスト登頂後、テレビ・新聞・雑誌などでの登頂特集を多く目にすることができましたが、当日は直接のお声で、人間性あふれユーモアに富む、そして優しい視線を感じながらのお話を伺うことができ、大変感銘を受けました。150余名の来場者の皆さまも会場いっぱいに響き渡る「拍手」で応えていらっしゃいました。

お話の途中で来場者の皆さまに「足の重りの方法でのメタボ解消」が参考になればというアドバイスもいただきました。但し無理のない範囲で、東急ハンズにて取り扱いがあるとのことでした。

最後に、お二方の質問と回答をもちまして90分余にわたる講演会を終了いたしました。

三浦氏への取材として当会場にも「フジテレビ」、そして、「港区広報トピックス」として報道をするための「ケーブルTV JCN 新宿」、の取材がありましたことをここに付記しておきます。

(国際学術文化委員会 小林 敬幸)

スリランカの家料理

日時：2014年3月9日（土）12時～15時30分

会場：港区立男女平等参画センター（リーブラ）4F 料理室



講師：リディヤガマ・ガマゲ・プシュパデワさん

今回講師にお迎えしたガマゲさんは、港ユネスコ協会の会員であり、竹下総理の時代に来日されて以来 20 数年日本に在住されています。とても親しみやすく、行動的で熱血漢でもいらっしやいます。

スタッフが驚いたのは、多数の香辛料を準備するガマゲさんの手際の良さ。また、スリランカ紅茶の輸入についても貴重なお話が聞けました。



メニューは以下のとおりです。

★ スリランカのチキンカレー

香辛料をフライパンでいって、ミキサーでつぶすところから作りました。いわゆるカレーのルーから作ったのですが、スリランカの家ではこれが当たり前の日常なのだな、と実感できました。

★ れんず豆のパリップ

パリップと呼ばれるれんず豆のカレー。カレーにキャベツが意外な組み合わせだったのですが、ココナツミルクも入り、とても美味しい味に仕上がりました。

★ スリランカ風サラダ

鶏肉を蒸して身を割き、きゅうりはつぶし、レモンとオリーブオイルのシンプルな味でした。

★ スリランカ風小松菜いため

ごく普通の小松菜と豚肉のいためたものですが、スリランカのとうがらし粉が絶妙な旨みを持っていて、異国の味になりました。

★ パパダン

市販のドライのパパダンを揚げて作ります。飽きないお味でした。

★ ミルクティ

加工していないミルクを使って、丁寧に入れられたミルクティでした。



スリランカではどこのお家にも香辛料となる木があって、つまんで来てはお料理に使う習慣だそうです。フライパン料理でも手で混ぜて、やけどしないかとはらはらしました。もちろん食べるのも手を使います。



また、日本人にとっては、どれもカレー料理としてひとくくりになってしまいがちですが、それぞれ少しずつ入れる香辛料が違って、全くの別の料理になってしまうことを認識しました。

紅茶にしても、それぞれの葉っぱの違いがガマゲさんにはくっきりとおわかりになるようでした。

ガマゲさんにはとてもお世話になり、とても楽しい時間を過ごさせていただきました。有難うございました。

（世界の料理委員会 金澤由里）

2014 年度総会 無事終了

日時：2014 年 4 月 25 日（金）19:00～20:30

会場：港区立生涯学習センター205 号室

総会は、松本 洋 副会長の司会で始まりました。高井光子会長から、「1981 年の創立以来、33 年間、国際都市港区ならではの活動を心がけ、ユネスコ精神に則った「世界の平和と人類の幸福の実現」へむけての事業を積み重ねてきました。港区からの支援にたいして感謝するとともに、会員の積極的な参加にお礼を申し上げたい」との挨拶がありました。

港区役所からは、武井雅昭区長、白井隆司生涯教育推進課長、五十殿康代生涯学習係長、三輪悦子・旧担当、上矢圭一・新担当が出席下さいました。



武井区長から、2020 年の東京オリンピック・パラリンピックの開催に向けて、港区は台場がトライアスロン会場になり、国立競技場も新設されるなど、動きが慌しいが、区でも英語、中国語など 4ヶ国語による案内を一般化するとともに、おもてなしは、Face to Face が大事だから、その面の強化も考えていきたい。当協会のご協力をお願いするとのご挨拶がありました。

2013 年度の事業報告、決算報告、監査報告、2014 年度の事業計画、予算が承認されました。

役員関係では、高井会長が続投し、松本洋副会長、永野博副会長の副会長二人制となりました。監事には、菊地賢介監事の継続と、新しく青野光裕氏が就任することがまりました。

その他は、若干の役職移動をする案が承認されました。会員の出席者は 25 名でした。（事務局長 富田晴雄）



港ユネスコ協会の委員会紹介とお誘い

活動・事業は下記の 8 つの委員会に分かれて、委員会の企画・運営によって、ボランティア精神のもと行われています。どなたでも、また、いくつの委員会にでもお入りいただけます。皆様のご参加をお待ちしています。

*** 会員開発委員会** ・ ・ 新規会員の開拓と、会員どうしの交流・親睦をはかることを目的とします。「新入会員を囲む会」、「各国大使館訪問」、会員が講師になって特技・趣味・経験を披露する「MUA サロン」が主な事業です。

*** 広報プレティン・インターネット委員会** ・ ・ 和文と英文の会報の編集・発行と、ウェブサイトの運営を行っています。会報「プレティン」は、協会の活動を記録として残すものです。会員の活動の様子と生の声がここに凝縮されています。多くの方がたに港ユネスコ協会を知っていただき、活動に参加していただける広報に努めています。

*** 国際学術文化委員会** ・ ・ 「国際シンポジウム」は、年 1 回、港ユネスコ協会らしいテーマを選び、専門家をパネリストに招いて開催します。「ディプロマツツ・レクチャー」は、駐日各国大使や外交官を対象に、外務省の方から日本の現況を英語でお話ししていただきます。「国際理解講演会」は年 3 回、国際理解を促進し、深めるための講演会を企画運営します。

*** 世界の料理委員会** ・ ・ 年 3 回「世界の味文化紹介シリーズ」を開催しています。さまざまな国の講師による母国のお話の後、料理実習を行い、実際に自分たちで作った料理を試食します。日頃目にしない珍しい食材も多く、食文化を通して、世界の人々の暮らし・信仰・歴史など多くのことを楽しく学ぶことができます。

*** ユース活動委員会** ・ ・ いろいろな国の若い人々の交流の機会を作ります。留学生の参加を呼びかけ、年 1 回ユネスコ・ユースフォーラムを開催しています。

*** 文化体験教室委員会** ・ ・ 文化への取っ掛かりの機会を提供するために開かれる体験教室です。

*** 語学研修委員会** ・ ・ 英語会話教室を週 1 回夜、港区立センターにおいて開講しています。

*** みなと区民まつり委員会** ・ ・ 毎年 10 月に芝公園一帯で開かれる「みなと区民まつり」に初回から、参加しています。ユネスコ活動への理解を一般の方がたに呼びかける良い機会にもなっています。

支援活動については、10 頁をご覧ください。

以上

事務局人事の交代のお知らせ

- *事務局長を務めて下さった富田晴雄さんが5月末日をもって退任されます。また、葛西章江さんは6月末日を持って退職されます。2年間余りにわたるお二人の多大なご尽力に心から感謝申し上げます。有難うございました。
- *新事務局長として、会員の須田康司さんが6月1日就任されます。また、桐渕泰雄さんが7月1日からお勤め下さい。6月からは、各人、週3日の勤務となります。どうぞよろしくお願いいたします。

事務局便り

【ようこそ 新入会員】 個人会員：広瀬奈保子さん 学生会員：吉原浩昌さん、牛腸悠太さん
賛助会員：林 典夫さん

【今後の行事予定】(詳細は別途、チラシやホームページでご案内します)

- ☆7月6日(日) 12:00~15:30 世界の味文化紹介「台湾の薬膳料理」会場：港区立男女平等参画センター
講師：劉 淑恵 先生(薬膳料理研究家・薬剤師) 参加費会員：1400円、一般：1900円
- ☆4月16日~7月16日 英会話初級クラス、毎水曜日、18:30~20:30、コース全14回、
講師：マーク・マードック先生 会場：港区立麻布区民センター

【ご寄付、ご寄贈品などの、ご協力ありがとうございました】

(A) 日本ユネスコ協会連盟の東日本大震災子ども支援募金(奨学支援金として)

☆4月8日(火)、第1回国際理解講演会「エベレスト いつまでも挑戦」会場での募金：5,100円

(B) ミンダナオ子ども図書館への寄贈と寄付 ☆衣料品：岩田麻衣さん ☆2,000円：永井美智子さん

【ご協力をお願い】

*日ユ協連・東日本大震災子ども支援募金 常時受け付け中です。

*ミンダナオ子ども図書館への寄贈品(衣料品など：新品・中古品[洗濯済]、除・毛織物)。事務局まで。

港ユネスコ協会事務局 (火~金 10:30~17:30)

〒105-0004 東京都港区新橋3-16-3 TEL 03(3434)2300 TEL・FAX 03(3434)2233

Eメール：info@minatounesco.jp

ウェブサイト：<http://minato-unesco.jp>

■編集後記■ ◆ソチ・オリンピック後も世界で日本人スポーツ選手の活躍が続いています。マー君、有ダルビッシュさん、錦織圭さん、一郎さん、石川佳純さんなどたくさんの方々です。いろいろな分野で日本人の活躍ニュースがもっと聞けると勇気をもらえ、幸福感が増しますね。(坂下愛子)

◆歳を重ねるにつれて、「如何にして脳の老化の速度を緩和するか」が大きな興味の的となりつつある。一説によれば、雑談を交わすことも効果がある由である。雑談を成立させる為には、側頭葉に蓄積された記憶を前頭葉が引き出す為の回路を頻りに整える必要があるからだそうだ。記憶力強化にも良いらしい。大いに雑談すべし...か?(須田康司) ◆昨秋、映画「天心」を観たこともあり、友人グループと一緒に茨城県五浦(いづら)海岸にある天心ゆかりの六角堂の見学に行ってみた。3.11で流失した後、関係者の支援・協力により、2012年4月に当初の設計に忠実な形で再建されたそうだ。天心はここを「観瀾亭」と称し、太平洋の波の音を聞きながら思索に耽ったというのが、独特の美観にあふれた入江にあり、しばしタイムスリップして当時に想いを馳せる一日となった。(棚橋征一) ◆葛西章江さんという良きパートナーと仕事が出来て、幸運でした。2年目になると、色々改善したいと思うわけだが、壁が厚すぎた。プレティンで言えば、校正は事務局の仕事になってしまう。執筆者、編集者、校正と三者がいる。また、単なる記録簿に毎回10万円使うのは、いかがか?広報としての効果を強める工夫が求められよう。(富田晴雄) ◆5月15日は京都3大祭の一つ葵祭。古くからの賀茂祭を葵祭と呼ぶようになったのは江戸時代の1694年に祭が再興されて後のこと。平安後期の装束での500名余りの行列のすべてに葵の葉が飾られる。今年、いつも使う葵の葉が鹿や環境の害で壊滅状態に陥り、関係者を慌てさせた。その危機を救ったのは、「家康」ゆかりの静岡市葵小学校の子ども達が丹精込めて育てている沢山の葵の葉を提供したからだだったとテレビで報道されていた。故郷・和歌山は徳川御三家の城下町ということで、「葵紋」には馴染んできたが、葵の葉の繊細さなどについては何も知らなかった。(高井光子)